

目を覚ますと、知らない天井があった。視線を動かすと、私が寝ているベッドがカーテンで仕切られているのが分かる。どうやら病院に運び込まれているようだ。起き上がると窓の外が見えた。外はよどんだ雲が広がっていて、銀色に輝く雨が降っているようだった。

「丸子イクさん、目が覚めましたか」

「え？」

「丸子イクさん」

「ちがいます」

知らない名前だ。

「私は門谷めぐみです」

そう答えると、看護師さんは顔色を悪くし、すぐにどこかへ行ってしまった。しばらくするとバタバタと激しい足音と共に、医者らしき人があらわれた。

「丸子イクさん、ではないのですね」

「私は門谷めぐみです」

「最後の記憶は、どこですか」

そう言われて思い出すのは、...

「キヴォトス試験を受けに来て、そこに知り合いがいて...
それで...」

そう、以前から試験を受けると言っていたクラスメイトの夏目さんだけでなく、小日向さんがいてひどく驚いたのだ。話しかけられる間柄ではないので、特に何もせず試験会場に入ったところまで記憶にある。

「よく、聞いてください」

医者が真剣な表情をするので、急に緊張してきた。難病なのだろうか。

「キヴォトス試験に合格した方はすべて記憶を抹消されるはずなのです」

「え？」

記憶を抹消という技術があることに驚いたし、それが行われていることにも驚きを隠せない。そんな非人道的行為が許されているのか。キヴォトスに行くと、親や友達と会うことができなくなるというのはそういう仕組みだったのだ。理解はできるが納得のいかない状況である。

「私は不合格ということですか」

「いえ、あなたは合格して現在キヴォトスにいます」

医者から視線を外して外を見る。変わらず雨が降っている。雨が降っているせいで建物の様子は伺うことができない。キヴォトスは極秘の訓練学校なので地図に載っておらず、どこにいるか見当もつかない。ただ、鈍色の空に謎の光の環があり、今までと違う世界に来たのだなと思う。医者が言葉をつづけるので、意識を外から室内へと戻す。

「記憶を消す作業は二回行うことができません。また、キヴォトスの外にでることも不可能です。あなたは記憶を持っていることを隠したままキヴォトスのゲヘナ学園に所属してもらいます」

ゲヘナ学園はなんだかおどろおどろしいところだ。いや、そもそもキヴォトスがそうなのかもしれない。町を歩いて

いると銃声や爆発音が聞こえる。こんなに治安が悪いところだったとは。自衛隊のような過剰に訓練された場所を想定していた私は、想定外の現状にビクビクしながら、下宿先とコンビニを往復している。明日からそれよりも遠い学園まで行かないといけないなんて、気が重い。重いのはコンビニの袋かもしれない。新作のスイーツを爆買いしてしまったのだ。とてもおいしそうだったのを思い出してホクホクしていると、ドババババと大きな音がして私は風圧に吹き飛ばされた。ガン、と建物に身体がぶつかり、私は地面に倒れる。

「限定スイーツってのはこれか？」

頭上から声がして、私のビニール袋が持ち上げられる。限定？たかだかコンビニのスイーツである。確かに最後の一つではあったが。

「これ、もらっていくぜ」

私は返事どころか起き上がることもできずに、足音が遠ざかっていくのを恨めしく聞くしかなかった。ゆっくりと顔を動かしてその姿を見る。ジャージを着たヘルメットの3人組。許さない。

「何をしている！！」

そこに第三者の声がして、ヘルメットたちが慌てるのが分かった。ダダダダと銃声がし、ヘルメットたちが倒れていく。

「大丈夫ですか」

駆け寄ってきてくれたのは、やけに露出度の高い学生服を

着た金髪の生徒だった。助けに来てくれたという状況も相まってか、金髪がやけにキラキラと光って見える。

「風紀委員です。あなたが倒れていたなので、咄嗟に応戦してしまったのですが」

「ええ、ありがとうございます」

彼女に起こされて、私はお礼を言いながらようやく立ち上がる。あたりを見渡してスイーツの入っているはずのビニール袋を探す。しかし、風穴が開けられまくったビニール袋はただのゴミと化していたので、そっと見なかったことにした。

「一年生を狙った犯罪が増えているんです」

入学して銃を支給されるまでは気を付けて、というどうにもならないアドバイスをいただいた。家まで送ってもらった私はスイーツのことはすっかり忘れ、彼女の腕についていた腕章のことを考えていた。

「諸君、風紀委員会によろこそ」